



欄間・衝立・パネル・天神様・天神様・獅子頭に代表される置物などの井波彫刻。楠・ケヤキ・桐を材料とし、荒彫りから仕上げ彫りまで二百本以上のノミ、彫刻刀を駆使します。

井波彫刻の起こりは、過去に幾度も焼失した井波別院瑞泉寺がその都度再建されてきたことに深くかかわっています。



住宅欄間



瑞泉寺本堂

宝暦・安永年間（一七六三年〜一七七四年）の瑞泉寺再建の折、京都本願寺の御用彫刻師前川三四郎が派遣され、井波拝領地大工がこれについて習ったのが井波彫刻の始まりとされています。

明治に入ると、寺院欄間に工夫をこらした新しい住宅用の井波欄間の形態が整えられました。昭和に入ってから、寺社彫刻は活発で、東本願寺・東京築地本願寺・日光東照宮など、全国各地の寺社・仏閣の彫刻を数多く手がけ、それと並行して一般住宅欄間・獅子頭・置物などにも力が注がれました。

時代の流れとともに豪華さを誇った寺



衝立



菅原道真の木像

社彫刻から、現在は民家の室内彫刻へと移り変わり、なかでも住宅欄間はその主力となっています。

名工の子孫によって受け継がれ、培われた「井波彫刻」は全国一の高度な技術を誇るようになり、昭和五十年五月、国の伝統的工芸品に指定されました。

平成五年七月には、井波彫刻会館が完成。館内には、二百二十年の伝統を誇る木彫刻技術の粋を集めた作品二百点を展示販売しています。



井波彫刻会館

彫刻師によって再建されてきた井波別院瑞泉寺。その表参道である八日町通り、門前町として発展した南砺市井波地域のシンボルで、別名瑞泉寺通りとも呼ばれています。石畳が敷かれ、周囲の古い家並みとともに落ちついた雰囲気をも出し出しています。道の両側には刻店、郷土玩具店、造酒屋などが軒を連ね、格子戸のある町家とともに趣のある風景を形づくっています。通りには木製あんどん、木製の欄干彫りのバス標識があります。また、それぞれ軒先には、世帯主の木彫の干支が掲げられています。



八日町通り

アクセス

○〔公共交通機関〕

JR西日本城端線福野駅から

車で約二十分

○〔自家用車〕

北陸自動車道砺波ICから

約十五分